

ひろの会だより

「死別の悲しみを分かち合う会」

11月の集い

日時：11月17日（土）午後2時より

会場：東区総合福祉センター

4階 ボランティア研修室

会費：200円

金子昭天理大学教授が、脳死や死についてこのように語っています。

脳死とはある意味、人工的に作られた死なのです。それよりも、私たちが昔から「これが死だ」と思っているのが、本当の死ではないでしょうか。体が冷たくなり、息をしておらず、瞳孔も散大している……という状態が思い浮かべられます。その時、医師は「ご臨終です」と宣言します。

ただ、そう宣言した時刻が死の時刻なのではなく、さらにそこからお通夜や葬儀があつて、ただ単に肉体的に死亡した状態から、人として亡くなり、また周囲の人々からそのように受容されていく過程が大切なのです。人の死はそうした一連の流れのなかにあるものではないでしょうか。

そして、そのように生から死へと向かう「いのち」の流れを尊重し、その時々には儀礼をもって対応してきたのが宗教でもありました。

ひろの会は、大切な方をなくした人が自分の思いや体験を語り合い、悲しみを分かち合う場です。大切な方の死は深い悲しみと苦痛をもたらします。ひろの会はそうしたメンバーの心の傷の回復を共に歩みます。

ひろの会では、どんな話をしてもいいし、話したくなければ他の方の話を聞くだけでもかまいません。話したくない人に話をするよう強制はしません。

ひろの会は特定の宗教や営利事業とは無関係です。

過去を振り返り、今思うこと（１）

五百井正浩さん

五百井と申します。神戸からまいりました。今日は今、思っていることをお話しさせていただいて、皆さま方のご意見、お考えをお聞きし、ヒントをいただければと思って寄せていただきました。

私は東本願寺に所属する僧侶でございますけれども、いろいろ本を読んだり学んだりしても、命ということがよくわからないんですね。以前は「命」と漢字で書くのが普通だったんですけど、このごろ平仮名で「いのち」と書いてあるのが多くなったように思うんです。「生命」に「いのち」とふりがなをつけたりします。

どうしてそうこになっているのかなと。「命」では表現しきれんようになってしまっているのか、それともいろんな命があるということかなと思ったりもしております。

また、全く知らない方の命と、テレビや新聞などでこっちが一方的に知ってる方の命、あるいは友人や家族、家族でも祖父母、両親、兄弟、子供、連れ合いと、それぞれ命の受け止め方、感じ方が違いますね。また、自分自身の命とも違う。動植物の命となるともっと違うように感じます。

自分を含めてのより近い身内の命となると、何か起こると真剣になりますけど、他の命というのは所詮他人事というか、何も考えてないことが多いように思います。

以前、電車への飛び込み事故があったというので電車が止まったんですね。その時に、「また飛び込みや。また止まってる」という声が聞こえて、電車が遅れたことへの怒りを言うているんやけど、亡くなられ

た方のことは誰もしゃべってないかと、その時ちょっと気になったんです。

それとか、イラクでも戦争状態になってますけど、テレビで映されている映像の奥には、人が亡くなっている事実があるわけですが、それが見えない。

そういうことを言い出すと、いろんな命があります。こんなことを考える人はあまりいないでしょうけど、たとえば薬ができるまでどんだけモルモットが実験台になつとんやろとか、動植物の命をいただかんと自分の身が保たないということもある。ある人にそういう話をしたら、「そんなこと考えてもの食べてたら、食べもんがまずうなるだけや」と、えらい怒られたことがあります。けれども、そういうことを考えることも必要ではないかと思ったりします。

私は田舎の育ちですんで、親から「米いうのはお百姓さんが一生懸命作ったんやから残したらあかん」というふうに育てられたんですけど、友達のところは子供が食べもんを残すのが当たり前やし、同世代の女の子なんか、「全部食べたらずるるやん」と言うてますからね。

一生懸命育てた命を「ありがとう」も言わずにそのまま捨てててというのは、命というよりモノという感覚になってしまっているのかなあと思います。

「いただきます」「ごちそうさま」とあまり言わなくなっているということもあります。家で言ってるんかもしれませんが、レストランで言ってる人はほとんどいないですね。

（２００４年６月２６日に行われたひろの会でのお話をまとめました）

他の分かち合いの会の紹介

自死遺族の会・びんご（びんごの会）で事務局をされている栗原尚道さんに、びんごの会についてお聞きしました。

びんごの会が発足したのは、2017年春。同年6月より、福山市内にある本願寺備後教堂の会議室で、偶数月（8月を除く）第2土曜日に集いを開いています。

びんごの会は、自死遺族の方であればどなたでもご参加できます。プライバシーを最大限尊重するために、参加者は自死遺族本人に限られ、当事者ではない人は分かち合いに参加しません。

分かち合いのルールがあります。

- ・メモや携帯電話の操作はしない
- ・話されたことを他の場所に持ち出さない
- ・他の人の話は最後まで聞く
- ・他の人の話を聴くだけでもかまわない
- ・他の人の話を批判したり、自分と比べて話さない

集いの進行などは当事者におまかせしているので、栗原さんも分かち合いの時は部屋の外にいるそうです。

悲しむということ（88） 林俊美

秋から冬に向かっていきます。広島は野球のシーズンが終わり、町を埋め尽くしていた赤い色が少しずつ冬の色に変わります。まだえびす講がありますけど。

えびす講は私が子どものころコート（オーバー）を買ってもらったり、出して着たりする節目のお祭りでした。年末に向けてあわただしくなり、防虫剤の匂いとともに冬の訪れを感じたものです。いつも忘れ物ややり残したことのあった子どもでした

から、焦らされている気がしていました。たまにしか会わない母がお小言を言ったことを思い出します。とても怖くて、そしてとても情けないと思っていました。

その母が、長く介護の生活をする中で、しんどい冬を迎えます。いつまでとわからないしんどさです。母が発熱で入院している病院に行くと、私のことを「おかあちゃん」と呼んで、「おにぎり作って」と言ったり、「仕事いかんでいて」と言います。とても幼い表情です。ふと自分の娘だと気づき、「なんしよるん。早よう帰らんと。○子（娘）がおなかすかせとるよ」と、心配してくれることもあります。しかし、そこには母はいません。ゆっくりと確実に母を失う道のりを歩んでいます。

母は私が嫌いによく言っていました。私も母が私を嫌っているのはわかっていました。妹は歌を歌ったり踊ったりが得意な細い子どもでした。私は曾祖母に育てられアトピーだらけで太っていて、虫や本や漫画が好きで、一人で過ごすのが好きでした。気に入られようと、100点を取ろうと努力したり、一緒に行ったわけではない紅葉狩りの作文で賞をとったりしていました。それは母にはとても嫌なことだったようです。

母に認められることもなく、あまり勉強や作文の得意でない妹が母に買ってもらったぬいぐるみを隠したりしていじめていました。

いつも、当然のように妹は母と出かけ、私は残されました。とてもさみしく、とても不安でした。失敗は隠したり、嘘をついたりしていました。その嘘はとてもへたく

そで、いつもばれては叱られていました。私を家から連れて出て置き去りにする、とても怖い叱られ方でした。

暗くなっていく道端や町中で、トイレに行っている間に母が帰ってきたらどうしようと思い、トイレにも行けず、何時間も待っていました。母が迎えに来ることはなく、父や曾祖母が迎えに来ました。

それでも、よそのお母さんより振り返るほどきれいで、おしゃれで、学校に来ると浮いている母のことが自慢でした。生命保険の外務員をしていて、良い成績をとって東京に行く母がとても自慢でした。尊敬もしていました。どんな時でもきちんと母のそばにしようと、子ども心に思ったものでした。

今の母は何時間も私を責めることもなく、期待外れとののしることもなく、お酒を飲んで歌を歌って笑うこともなく、153センチの私より5センチも大きかった母が今は見る影もなく小さくなり、決して白髪を許さなかった髪もまっしろになり、顔にはお化粧もしていません。少しずつ母を失っていくのだと思います。

難病でご主人をなくされた方がおっしゃっていた、「何年もかけて夫を失った」という言葉の意味が身に染みてわかります。

何かの役に立つわけではないのですが、毎日、母の病室に立ち寄り、顔を拭いて化粧水をつけ、指をマッサージする、この不必要な過程で死を受け入れていくのでしょうか。

終わりは明日かもしれませんし、一年後かもしれません。今は入院していますが、いずれ自宅に戻り、看取りの介護がはじま

ります。多くの人の手を借りながらの看取りです。母は介護の人すべてに「帰らんで。おって。さみしいけえ」と言います。さみしいのでしょうか。

私が訪問の仕事をしていた時、先生が「がん患者さんはさみしいんだよ」と言われたことを思い出します。なぜか「一人でもいい」と言っていた人でも、家族を捨てた人でも、家族の顔が見たくなったりするそうです。命の期限を意識すると人恋しくなるのかもしれません。

とりとめのない話になりました。この気持ちを出せる場所があり、皆様方がいらっしゃって、この会をありがたく思います。

11月1日と2日は死者の日です。メキシコやラテンアメリカでは、家族や友人が集い、故人への思いを語り合う、カトリックの諸聖人の祝日です。1日には子どもが、2日には大人が帰ってくると言われます。その時に思い出を語り合うのです。

ひろの会は毎月行われる死者の日のようなものです。自助グループです。いつもの場所で、いつもの時間に、飽かず弛まずお待ちしています。

事務局だより

○24日の講演会と文集「悲しむということ 3」が11月5日に中国新聞で紹介されました。40人ほどの方から「文集を送ってほしい」とお電話をいただきました。十数行の小さな記事を目に留めた方が少ないことに驚きました。

発行 ひろの会事務局（谷川）

広島市中区東白島町16-18

☎（082）221-5285